

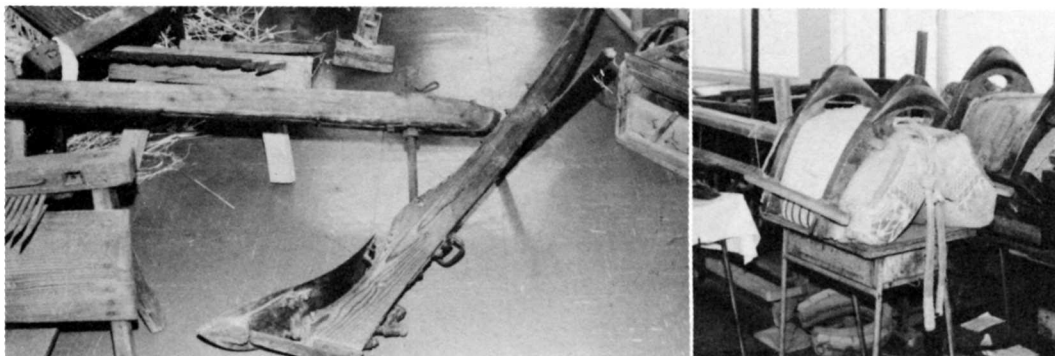
なえられたのです。絵はランプとって、明治になってあんどんにかわってでてきたあかりです。これは石油を糸にすいこませてともすもので電灯がいはんに使われるまで用いられました。

東村に電灯がついたのは大正4年(1915)、かぶ内、深仁井田、釜子についたのがはじまりです。それから、3年ほどおくれて小野田にも電灯がともりました。

つぎに農業のしかたについて調べてみましょう。

今の農業のしかたは、人力、畜力から動力にかわってきています。米づくりをとってみても、種まきから取り入れまでの作業に使う道具やきかいは大へんなかわりようです。つぎにむかし使われた道具やきかいはどんなものがあったか、家の人にもきいてうつりかわりを考えてみましょう。

——馬をつかって田畑をたがやしたもの——



馬耕

荷ぐら

馬耕が使われるようになったのは明治20年を過ぎてからです。また馬はにぐらをつけ、荷つけなわで荷物をしばって運びました。米俵は両側に1俵ずつで2俵を1駄といい、稲、草、しばなどは3わずつ左右にふりわけ6わを、木炭はふつうかたがわたて2俵の下に1俵をよこにつけ、6俵を1駄といったそうです。

せんばは稲やむぎのだっこく用の農具で、はば1.5cm、長さ40cmの鉄